寄り添い　ともに育つ

副校長　　榎本　勇司

大きな災害と航空事故とともに始まった2024年も、早一か月が過ぎようとしています。被災地や避難先で過ごす方々には本当に長い時間であったことと推察されます。余震や寒さでつらい思いをしている方々の生活が一日も早く改善されることを願うばかりです。横浜市でも、被災した児童が避難してきた場合の学校の受け入れ体制について、教育委員会から通知が出されています。「困った時はお互い様」の気持ちをもって助け合うことができるのが日本人の良さだと言われていますが、有事の際でも日本国内では、人々が協力や思いやりを忘れず礼儀正しいとして、これまで数多く世界から称賛されてきました。

本校の児童についても、そのような場面を何度も目にしています。登校時、転んでけがをしたり、困ったことがあったり、気持ちが向かなくなってその場に留まってしまったりする低学年の児童がいると、先に学校へ着いた児童が職員に知らせてくれます。職員が駆け付けると、必ずと言っていいほど上の学年の児童が一緒に寄り添って、「大丈夫。」「がんばって一緒に学校に行こうよ。」と、励ましたり慰めたりしてくれています。気持ちを切り替えて学校へと歩き始めた際にも、上の学年の児童は最後まで様子を見守ってくれています。助けてもらった児童は、学校へ着くと、お世話になった児童にその場でお礼を伝えます。お礼を言われた児童は、「がんばったね。」「よかったね。」と言葉を返し、少し誇らしげな足取りで教室へと急いで向かう姿がごく自然にあります。そういう姿を目にするたびに、こちらの胸が熱くなります。困っている人がいたら助けるのは当たり前、という態度で行動できる上級生の姿は、下級生にはとても頼もしく見えたことでしょう。小机小学校の児童は、ペア学年で活動をしていても、上級生が下級生を大切にし、範を示して行動し、下級生がその姿にあこがれを感じています。そして、それはきっと、これまで続いてきた小机小学校の伝統ともいうべき素晴らしい習慣となっているようです。

また、困っている子どもを見つけたときに、学校に連絡をくださる地域の方が多いのも、大変ありがたく思います。たまたま通りかかった方が、電話をくださるだけでなく、ずっと付き添っていてくださったり、お茶をくださったりと、地域で子どもたちを見守り、育てていこうという気持ちがよく伝わってきます。

先日、地域の材を生かした学年の活動が、小机小学校の SDGｓの取組として読売新聞の全国版に掲載されました。学校教育にはたくさんの地域人材のお力添えが不可欠です。PTA 活動はもちろん様々な地域の皆様に支えられ、子どもたちは伸びやかに育っています。どうか、子どもたちが、小机城址にある竹のようにまっすぐ育っていけるよう、保護者の皆様、地域の皆様に引き続きお導きいただきたいと思います。